

清代古銭書にみるパスパ文字の判読

吉池孝一

一

『古代文字解読の物語』(注1)という本の前文に次のようにある。「解読とは門を開くことであり、解釈とはその向こうにある広がりに関わることなのである」と。「門を開く」とはなかなか言い得て妙である。辞書を使い、ときに文法書をひもとき、「一定の手続き」に沿って進む。そうすれば、おのずと文の理解も進む。これは読解とか解釈にあたる。それに対して、文を理解するための「手続き」そのものを発見しながら読み解いていくのが解読ということなのであろう。

さてパスパ文字を使用する習慣は、元朝の滅亡後も、チベットの一部で近代まで続いた。それは印鑑や紙幣の銘文にみることができ(注2)。またチベットやアムドや内蒙古の仏教寺院の門扉にもパスパ文字による祈祷文が刻されているという(注3)。このような状況を見ると、パスパ文字資料にとって「解読」は必要であったのかという疑問も起こる。しかしながら、元朝の滅亡後、少なくとも中国の文人の間ではその使用の習慣は途切れてしまったとみて大過はないであろう。おそらくパスパ文字資料に接した近代のヨーロッパ人にとっても、この文字を読み解くには、そのための「一定の手続きの発見」すなわち「解読」という作業を経なければならなかったと想像する。解読といっても、パスパ文字の場合、この文字の背景に対する理解と、チベット文字に対する理解があれば比較的容易おこなうことができる。この仕事は、詳細は未だ明らかではないが、19世紀中葉のヨーロッパ人の研究によって完成されたとおもわれる。それ以後は、解読というよりも、「一定の手続き」を利用しておこなう言わば資料の読解とか解釈ということになる。それで問題の一つは、本格的な解読に至るまでに、どのようなアプローチがこの文字に対してなされたかという解読前史をつまびらかにすることであろう。

解読前史に関わる恰好の書を近頃入手した。『説銭』(注4)という書物である。この書は宋代より民国初期に至る銭幣に関わる29種の著作の影印を収める。それで、今回はこの書を利用し、パスパ文字が鑄込まれた貨幣がどのように扱われているか、その銘文をどのように読んでいるかということにつき確認をし、これをパスパ文字研究史のなかに位置づけてみたい。もっとも、ヨーロッパ人と中国人の研究の歩みが期を一にしているとも限らず、むしろ初期においては没交渉であるかもしれず、そのような見方をすると、それぞれの研究史が必要となるのであろう。しかしそれはいまま少し後の課題である。

さて 29 種の著作の内、パスパ文字銭の記述が見えるものとして先ず『欽定錢録』をあげることができる。これは清の梁詩正等が勅を奉じて編纂に着手し乾隆十五年(1750)に成り、『西清古鑑』に付して刊行したものである。その序に次のようにある。「内府之藏周羅几席、按状成圖、因之攷事」(句讀は吉池が付した。以下同様)。内府に蔵されているものをことごとく並べその形状によって模写を作ったとある。内府所蔵の実物によっただけあって、その模刻は極めて精密である。そこで、『欽定錢録』の卷十三の関係部分(『説錢』の 644 頁)をみると、漢字・漢語の至大通寶、パスパ文字・漢語の大元通寶、および銘文の一部にパスパ文字・漢語を含む至正通寶の三種の模刻が並んでおり、それぞれに解説が付されている。すべて円形の方孔錢(四角の穴が中央にある)で、その模刻と解説を確認すると次のようである。

漢字・漢語の至大通寶とパスパ文字銭の模刻がある。パスパ文字銭の模刻は極めて精密なもので「tay (大) 'üen (元) t'üŋ (通) bav (寶)」とあり、大元通寶であることはすぐにわかる。その模刻に対して次の解説が付されている。

右元武宗錢二品。前一品曰至大通寶、楷書。後一品曰大元通寶、西番篆書。

(右は元の武宗時代の錢二品である。前の一品には「至大通寶」とある。これは漢字の楷書である。後の一品には「大元通寶」とある。こちらはチベットの篆書である。)

これによると、このパスパ文字・漢語錢を「大元通寶」であると間違いなく読んでいる。

次に三種の至正通寶の模刻がある。一枚目はオモテ面に漢字・漢語で「至正通寶」とあり、ウラ面の上部にパスパ文字・漢語で「šin」とある。これは十二支の辰である。二枚目はオモテに漢字・漢語で「至正通寶」とあることは変わらず、ウラの上部にパスパ文字・漢語で「zi」とある。この「zi」は漢語の二であり貨幣の単位をあらわす。方形の四角い孔を隔てて下部に漢字・漢語で「二」とある。三枚目もやはりオモテに漢字・漢語で「至正通寶」とあり、ウラの上部に「mav」とある。これは十二支の卯である。なおこの三種の寸法は大中小と次第に小さくなっている。以上は現在の目から見た資料の状況であるが、これに対して付された当時の解説は次のようである。

右順帝至正通寶錢凡三種、以次遞小。前一種及最小一種背文西番篆、讀作「巴納」、蓋梵語「錢」字也。第二種背文上一字亦西番篆、讀作「額」、下楷書曰「二」、蓋當二耳。

(右は順帝時代の至正通寶錢三種である。大より小へと並ぶ。初めの一種と後の最も小さなもののウラの銘文はチベットの篆書であり、「巴納」と読む。梵語の「錢」の意であろう。二種目ウラの銘文の上部にある字もまたチベットの篆書であり、

「額」と読む。下部にある字は漢字の楷書で「二」とある。當二[當～は貨幣の大きさを示す単位]を示すのであろう。)

これによると、一枚目の「šin」と三枚目の「mav」は「巴納」と読み梵語の「錢」の意であるという。この「巴納」という音形が何を指すか明らかではないけれども或いはサンスクリットの *bhānda* (*nd* の下にそれぞれ点を付す。財物、資産の意)に関わりのある語であるかもしれない。二枚目の「zi」であるが、こちらは「額」と読むということであるが「額」の意味するところは明らかにされていない。

以上を要するに、乾隆十五年(1750)『欽定錢録』の至正通寶のパスパ文字の部分の読み「巴納」「額」は荒唐無稽なものであり、この文字をまったく理解していないことがわかる。もっとも、大元通寶に相当するパスパ文字錢のほうは正しく「大元通寶」と読んでいるように見える。しかしながら、至正通寶のパスパ文字銘文を「巴納」「額」などとするとところからみて、この「大元通寶」とする読みは判読の結果ではなく、この種の銘文を大元通寶とする習慣があり、それによったとも考えられる。

『欽定錢録』が私製の錢譜ではなく、勅を奉じて編纂したものであるからには、ここには当時の平均的な学問水準が示されているとみてよいであろう。パスパ文字を正しく判読していないという点で判読の出発点とすることができる。

三

次に『吉金所見録』がある。これは錢譜として名高いもので清の初尚齡によって嘉慶二十四年(1819)に刊行された。やはり貨幣の精密な模刻を掲げ、それに解説を付している。巻之十三の関係部分(『説錢』の772-773頁)を順に見ていくと次のようである。

先ず漢字・漢語の至大通寶を挙げ、次いでパスパ文字・漢語の大元通寶の模刻を挙げる。その解説は次のようである。

右武宗大元通寶蒙古字書、當五錢。『西清古鑑』武宗錢二品、前一品曰至大通寶、楷書。後一品曰大元通寶、西番篆書。

(右は武宗時代の至大通寶、蒙古字書、當五錢である。『西清古鑑』は「武宗時代の錢二品である。前の一品には至大通寶とある。これは漢字の楷書である。後の一品には大元通寶とある。こちらはチベットの篆書である」とする)

『西清古鑑』とは先の『欽定錢録』のことである。同書の引用に拠り大元通寶と正しく読んでいる。なおパスパ文字を、『欽定錢録』は「西番篆書」と称し、『吉金所見録』は「蒙古字書」と称するわけであるが、これはパスパ文字の背景に対する見解の進展とみてよい。

次にパスパ文字錢の模刻がある。「ʃi (至) 'üen (元) t'üŋ (通) bav (寶)」とあり至元通寶であることがわかる。大小二つの模刻があり、その解説は次のようである。

右大元通寶蒙古字書錢二品、以次遞小。。

(右は大元通寶、蒙古字書錢二品、大小の順に並ぶ。)

至元通寶を「大元通寶」と誤って読んでいます。これが誤刻でなかったとしたならば、この読みは判読の結果ではなく、この種のパスパ文字錢即ちパスパ文字だけから成る貨幣の銘文は大元通寶とするという習慣があり、その習慣に従ったと考えざるを得ない。

最後に至正通寶の模刻がある。幾つかの模刻のうち、四種の至正通寶につき興味深い記述がある。以下順次紹介する。

一つ目は「šin」(辰)とする至正通寶の模刻であり、その解説は次のようである。

穿上有蒙古字。『西清古鑑』背文西番篆書、讀作「巴納」、蓋梵語「錢」字也。翁宜泉云、背文蒙古「辰」字。

(穿[貨幣中央の方形の穴]の上部に蒙古字がある。『西清古鑑』は「ウラの銘文はチベットの篆書であり、「巴納」と読む。梵語の「錢」の意であろう」とする。翁宜泉はこの銘文は蒙古の「辰」の字であるとする。)

『吉金所見録』の解説は、『西清古鑑』すなわち『欽定錢録』の説および翁宜泉の説を紹介する。このうち翁宜泉は正しく「辰」と読む。翁宜泉という人物については『吉金所見録』の凡例をみると「余古金之好、四十餘年來同好者、海昌陳輿伯、廣陵江秋史、北平翁宜泉、同邑趙北嵐數家。」とある。これより『吉金所見録』の著者と同時代の北平(現在の北京)の人であることがわかる。また鮑康著『觀古閣叢稿』(同治十二年・1873)には「古泉彙攷八卷、大興翁宜泉先生樹培著也。」(『説錢』43頁)とあり翁樹培・宜泉には『古泉彙攷』という古錢書のあったことが分かるけれども『説錢』には掲載されていない。

二つ目は「zi」(二)とする至正通寶である。その解説は次のようである。

右至正通寶、當二錢。背上一蒙古字、下楷書「二」字。『西清古鑑』順帝至正錢有一種、背文上一字亦西番篆書、讀作「額」。下楷書「二」字、蓋當二錢也。

(右の至正通寶は當二錢である。ウラ上部には蒙古字があり、下部には漢字楷書の「二」の字がある。『西清古鑑』は「順帝時代の至正錢のウラ上部にもチベットの篆書があり額と読む。下部の漢字楷書の二の字は當二錢の意であろう」とする。)

『西清古鑑』すなわち『欽定錢録』の説を紹介するのみで、パスパ文字「zi」(二)の正しい読みはない。

三つ目は「u」(午)とする至正通寶である。その解説は次のようである。

背文翁宜泉云、是蒙古「午」字。

(ウラの銘文につき、翁宜泉は蒙古の「午」の字であるとする。)

翁宜泉の正しい読みを紹介する。

四つ目は「ši」(十)とする至正通寶である。その解説は次のようである。

右至正當十大錢、背上亦有一蒙古字。翁宜泉云、背上蒙古「十」字、蓋當十錢也。

(右の至正通寶は當十の大錢であり、ウラ上部にはまた蒙古字がある。翁宜泉は、ウラ上部を蒙古の「十」の字とし、當十の錢であるとする。)

翁宜泉の正しい読みを紹介する。

四

以上を要するに、乾隆十五年(1750)の段階では「šin」(辰)、「ži」(二)、「mav」(卯)のいずれも正しく読むことができなかつたけれども、70年後の嘉慶二十四年(1819)の段階で翁宜泉の説を引き「šin」(辰)、「u」(午)、「ši」(十)を正しく読む。乾隆十五年(1750)から嘉慶二十四年(1819)に至る間にパスパ文字の判読が進展したのであろう。本格的な解読に至るまでにどのようなアプローチがこの文字に対してなされたかという解読前史を示すものと期待してよいかもしれず、翁宜泉の読みがどのように為されたかを知りたいところである。これを次の課題としたい。

注

- 1) モーリス・W・M・ホープ著、唐須教光訳 1982『古代文字解読の物語』新潮社。
- 2) 吉池孝一 2004「パスパ字チベット語の印章と紙幣」『KOTONOHA』21号参照。
- 3) Poppe,N.1957 *The Mongolian Monuments in Hp'ags-pa Script*,Second Edition translated and edited by J.R.Krueger,Wiesbaden,p.15.
- 4) 桑行之等編 1993『説錢』上海科技教育出版社。全 1220 頁。